

事後指導は責任実習に関して綿密に行われ、振り返りでは幼稚園と保育所を併記で記録させている。2つの実習を相対化しながら振り返り自己評価をし、保育者としての自己課題を明確にしていくことが求められている。また振り返りの際の項目として、学生が振り返りやすいものが挙げられていた。たとえば、「子どもに助けられたと感じたこと」、「自分の予想を超えた子どもたちの発想に感心したこと」、「思いもよらない反応に戸惑ったこと」などである。これら4年間の各実習すべての振り返りは実習センターにポートフォリオとして保管されていて、教員がいつでも個人指導に生かせる記録となっている。

#### 4. 視察の感想

今回視察を受け入れてくださった上垣内伸子先生は十文字学園女子短期大学紀要(2000)の「実習を通して自らの成長を実感できる実習指導を目指して」の中で「子どもと実際にかかわり、記録と話し合いによって振り返って考えることを通して、認識が深まるだけでなく(抜粋)次の実習で具体的に行動に表せることにより、考えを行動に移す力も育ってきたように思えた」と述べられて

いる。当時から自己評価、振り返りを積み重ねて実習体系を切磋琢磨してこられて学生の成長を実習と通して実感してこそその取り組みであり、本研究が目指す実習記録のあり方を示唆していただいたと考える。

(文責：松永静子)

#### <まとめ>

今回は実習記録の活用の検討を行うための予備調査ともいえる視察を行った。視察結果から学生が保育所実習、施設実習の実習後の自己評価、振り返りを通して自分の成長を可視化し、将来にも生かせる記録になり得ることが明らかになった。これらの結果を現在の実習指導の中で具体化し、各実習すべての振り返りと自己評価をもとに学生一人ひとりが自分の成長に自信をもつことができる指導を目指して記録の検討をすすめていきたい。

謝辞 今回の視察、資料提供にご協力いただきました、文京学院大学柄田先生、和泉短期大学相馬先生、十文字学園大学上垣内先生、共立女子大学白川先生に心より感謝申し上げます。

## 平安私家集の研究—和泉式部集とその周辺—

久保木 寿子

和泉式部の作品研究に関する、筆者によるこれまでの研究論文の集大成を目的として研究助成を申請した。それによる研究結果は、大略、以下の通りである。

1) この間、考察の及んでいなかった部分を補完すべく、研究と執筆を進めた。

その一つが『和泉式部日記』についての考察で

ある。従来、『日記』研究は、和泉式部の伝記考証には使われながらも、他作説の影響もあってか、『和泉式部歌集』とはほぼ無関係に進められてきた。稿者は、『日記』自作説の立場から『歌集』との連続性について考察を進めてきたが、「追懐の方法—『和泉式部日記』の場合—」(『王朝日記を考える—追憶の風景』所収 武蔵野書院2011)の執筆を契機に、当該年度内に、①「『南

院』の時空－『和泉式部日記』試論－（『中文学』91号2013・5）、②『『和泉式部日記』叙述の方法』（白梅学園大学・短期大学『紀要』50号2014・3）の2論文を執筆した。

『歌集』所収の〈帥宮挽歌群〉を『日記』に突き合わせる時、追懷的に過去を揺曳する私的な「場」と、それとは無縁な皇権に絡む政治的な時空としての「南院」が浮上する。『日記』の二元的な主題展開の来由がここにあることを論じ（①）、さらに、それに絡む特異な叙述の有り様について考察した（②）。①は従来の『日記』解釈に、一石を投じ得たのではないかと思う。

また、この間に、これまでの研究を総括する方途として、

- ・和歌表現における「心物対応構造」の変化の観点から、和泉式部和歌の表現機構について考察を加えるべきこと、
- ・現代に及ぶ短詩型における「連作」の問題について、その最初期にある和泉式部の「連作」について、「連作史」上の意味付けを行う必要、

この二点に想到し得たのは、収穫であった。

前者は、中世和歌への転換点にある和泉式部の和歌を、「古今集的表现」からの離脱の具体相を示すものとして捉える方法たり得ることに、今更ながら気づいたということであり、後者は、等閑視されがちであった和泉式部の「連作」をマスと

して捉えることで、新たな観点からの再評価が可能になるのではないか、ということである。これらについては、現在、それぞれ幾分かの考察を進めているところである。

今後、上記二点に、これまで行ってきた「題詠史」に絡む和泉式部の定数歌の意義の考察を加えて、総論としての形を整えることにしたい。

2) 既発表論文のパソコン入力、及び使用歌番号・本文の統一を計った。

入力はすべて終了した。また、長期にわたる執筆の結果、この間の使用テキストの変化－本研究の場合は、底本としての榊原本の位置は動かないものの、通用の活字本は、当初の清水文雄校訂『和泉式部歌集』（岩波文庫）から、電子版「新編国歌大観」、あるいは同「新編私家集大成」に代わり、付された歌番号・本文に変更が生じた。1500首に及ぶ引用和歌の歌番号・本文の整理には、多大の時間・労力を必要とすることから、入力と同様、作業補助を郷原素子氏に依頼し、和泉式部歌集関係については、ほぼ整理が終了した。ただし、勅撰集・和泉式部歌集以外の私家集の点検については手つかずであり、和泉式部関係でも『日記』の使用本文の統一整理等が未了である。

以上

## ガイドッドセルフヘルプの概念を用いた摂食障害治療の効果研究

発達臨床学科 西園 マーハ 文

### 1. はじめに

神経性無食欲症、神経性大食症を代表的病態とする摂食障害は、若年女性を中心に有病率の高い疾患である。しかし、発症当初、当事者は治療への抵抗を示すことが多く、困難な治療経過となることが少なくない。海外でも、神経性無食欲症の

治療はまだ発展途上であるが、神経性大食症については、本人の動機付けを高めるために、治療初期にガイドッドセルフヘルプ（指導付きセルフヘルプ）の概念を用いた治療が実践され、この効果が示されている。そして、ガイドッドセルフヘルプに基づくワークブック等をまず用い、これだけ